

糸状虫症

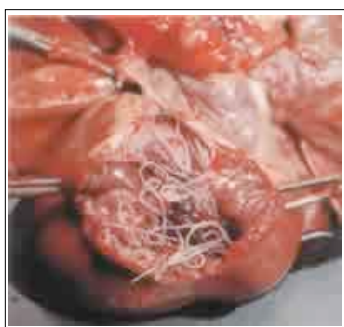
Heartworm Disease, *Dirofilariasis*

糸状虫症は蚊によって媒介される寄生虫による病気です。予防をしていなければ犬の死亡原因のトップと言われる代表的な病気です。また、猫、フェレットなどの動物へも感染します。

日本では北海道の一部を除いて全国的にその発症が見られます。これはこの病気を媒介する蚊の生息地域と関係があるためです。

原因

*Dirofilaria immitis*の右心系への寄生が原因で、寄生する部位や数により様々な弊害を起こします。また、寄生する場所が心臓であるために全身的に症状が出ることも特徴です。



フィラリアの寄生した心臓

症状

心不全をはじめとして、咳き、体重の減少、運動を嫌う、失神、腹水、浮腫、血色素尿（オシッコが赤い）、貧血、その他肝臓や腎臓の障害など全身的に様々な症状がでます。寄生虫の数が多いと、大静脈症候群といって特に重篤な症状を現すことがあり、突然死も起こります。

診断法

症状、予防歴などから、一般身体検査を行います。次に血液を採取して血液中にマイクロフィラリア（フィラリアの子虫）がいるかどうかを顕微鏡で確認します。もしなければ次に特殊な血清学的検査を用いてその寄生の有無を確かめます。このほか同時に採取した血液を用いて、血清生化学検査を行い全身の状態を調べます。その後症状に応じて、レントゲン検査、超音波検査などを行います。

但し、症状が重篤な場合には検査を行うこともできない場合があります。

治療法

症状や寄生状態により違います。しかしながら、この病気は予防が最大の治療であることを頭に入れておいてください。

軽症～中程度の場合には、駆除剤によってフィラリアを駆除したり、外科手術により成虫を取り出します。その後内科療法で投薬を行い、再寄生を防止するために予防薬の投与を開始します。

重症の場合や大静脈症候群が起こっている場合にはほとんど駆虫や手術が行えないことが多いものです。また、仮に行うとしてもかなりのリスクを伴います。内服薬などを投与して症状の緩和を行う程度しかできないこともあります。

自宅での看護法

獣医師の指事にしたがいケアしてあげてください。お家でできることや注意すべきことはその病態により様々です。しかしながら病態によっては治療が不可能な場合があります。

まず、散歩など運動は獣医師の指示があるまでは極力ひかえて下さい。食欲があれば主治医の先生に心臓病用の処方食を出してもらおうと症状の緩和に役立ちます。

予防法

月に1回獣医師から処方される予防薬を飲ませるか、外用でつけるか、あるいは半年に1回注射すればこの病気は100%確実に予防できます。犬を飼育したらフィラリアの予防薬をすることは基本の基本です。フィラリア予防をできないような人が犬を飼うべきではありません。

予防薬にはいくつかの種類があります。日本で許可されているフィラリアの予防薬は、錠剤と散剤、そしてチュアブルタイプ（半生のおやつのようなもの）と半年に1回の注射の4種類のみで、水薬はありませんので注意して下さい。予防薬の投与期間は蚊の発生期間と関係があります（フィラリア予防薬は単純に蚊がいる間だけ飲ませればよい薬ではありません）。一つの目安として気温が15℃になったら始めて、気温が15℃を下回った次の月まで予防する必要があります。詳しくはお住まいの地域の主治医の先生に相談してください。

日本ではフィラリア予防薬は動物病院以外では入手できません。ペットショップなどでの密売を見かけたらお近くの獣医師会までご連絡ください。

メモ

この病気は犬の病気の中でも最も有名なもののうちのひとつです。いまだき、フィラリアの予防をしない犬を飼育するなどのもつてのほかです。集計データにもよりますが、一般的に、1夏で38%、2夏で89%、3回夏を越した犬の92%がフィラリアに感染していると言われています。たまたま室内飼育だからといって予防をしない方がいますが、室内飼育であってもかなりの率で感染しています。室内飼育でも、散歩などにいけば蚊に刺されるのは当たり前ですから、室内飼育は予防しなくても大丈夫というのは全くの嘘です。動物は自分で予防薬をもらいに來ることはできません。あなただけが頼りです。